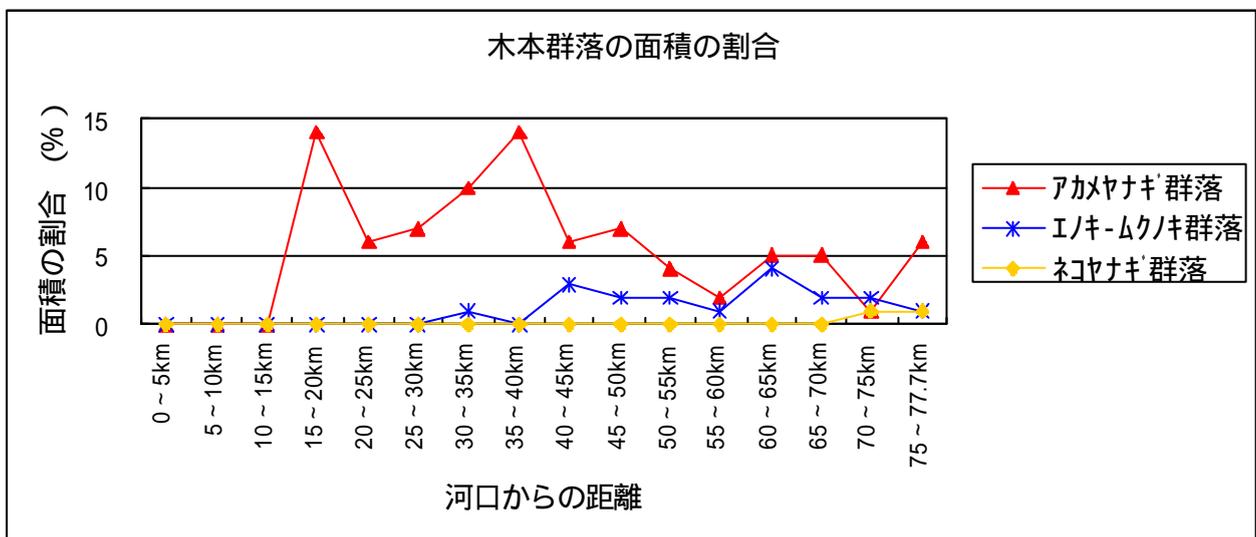
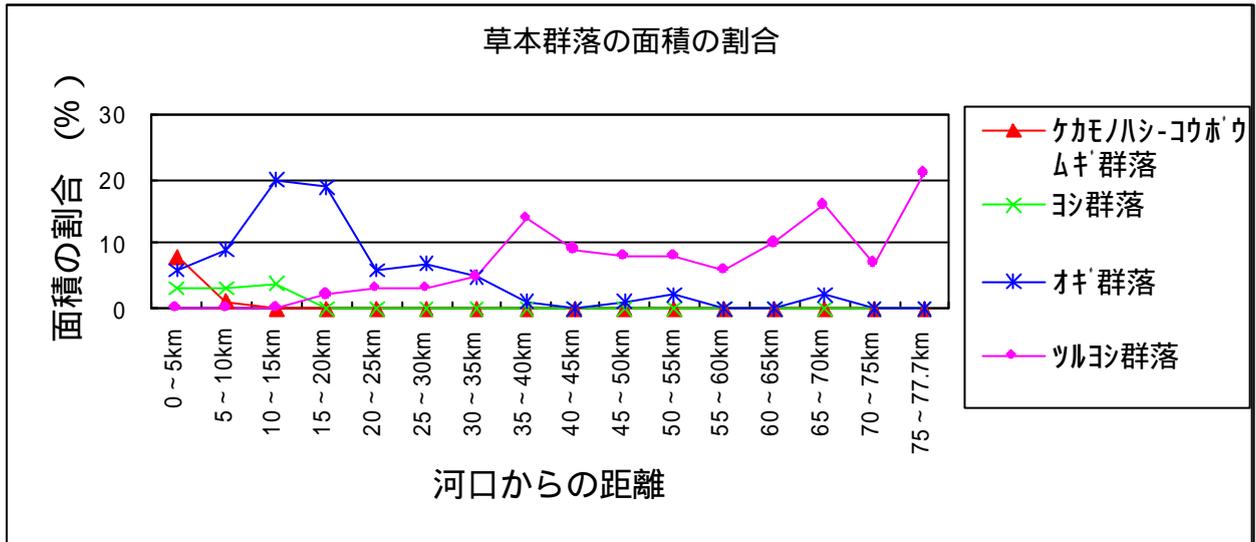


### 3 - 3 植生の河川縦断方向の変化

環境特性の違いに応じて、上流、中流、下流では、出現する植物が異なります。

吉野川に優占的に出現する植物の群落を幾つか選び、水面の面積を除いた河川区域の中に占める群落面積の割合を、グラフにしました。



平成7年度河川水辺の国勢調査結果より作成

優占的に出現する植物群落が、河川縦断方向に変化するのがわかります。草本群落をみると、沿岸近くには海浜植生のケカモノハシ - コウボウムギ群落、汽水域にはヨシ群落とオギ群落、淡水域ではツルヨシ群落が優占しています。木本群落をみると、アカメヤナギ群落が優占的に出現しますが、上流に行くとエノキ - ムクノキ群落、さらに上流に行くとネコヤナギ群落の割合が増加します。

植物群落の移り変わりと、周辺環境の変化との係わりを景観の違いから考えてみましょう。

(河口から0～5 km上流 海浜植生がみられる河口干潟：干潟上の砂地)



少し標高が高い場所に、植物が見えます。水際は泥地であるのに対して、ここは砂地になっています。不安定な砂地には、ケカモノハシやコウボウシバ、コウボウムギなどの海浜植物が生育しています。

(河口から5～15 km上流 干潟：泥干潟)



汽水域の水際の泥地には、ヨシがみられます。少し標高が高くなると、オギやアイアシがみられるようになります。第十堰下流の汽水域では、樹木はほとんどみられません。ヨシやオギが広く分布しています。

(河口から15～25 km上流 第十堰～柿原堰にみられる樹木)



第十堰から柿原堰の間の砂州には、アカメヤナギを始めとする樹木が繁茂しています。ここには、汽水域に多くみられたヨシは、ほとんどみられません。しかしオギは、広い面積を占めています。

(河口から25 km以上 柿原堰より上流)



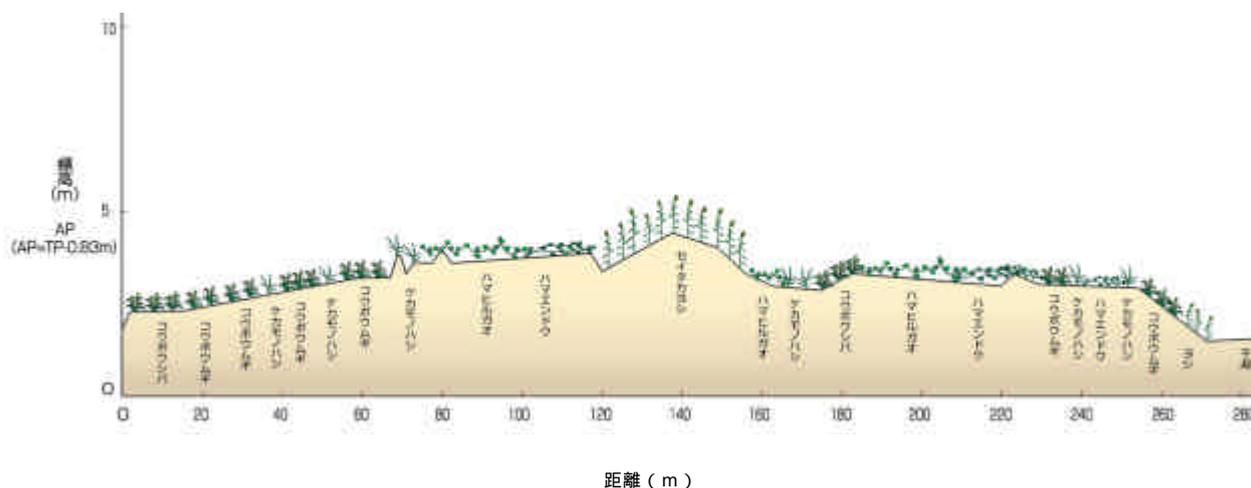
柿原堰より上流には、植物にあまり覆われていない砂州が広がっています。しかし、砂州の水際や高水敷近くには、植物がみられます。砂礫地の水際には、ツルヨシやヤナギ類がみられます。洪水になってもあまり水に浸からない高い場所には、エノキやムクノキ等の樹木がみられます。岩津より上流では、竹林が広く分布しています。上流に行くに従い、山地が川へ迫るため、川の風景は変化します。しかし、河道内にみられる植物の状態は、柿原堰から池田ダムまでほぼ同じような構造が続いていると考えられるのです。セグメント区分も同様に、柿原堰から池田ダムまで、セグメント2に区分されています。

もう少し詳しく見てみましょう。

(河口海浜部：河口～河口より上流 2 km)

吉野川の河口には、大きな河口干潟があります。河口干潟上に成立している植物群落の断面を、図に示しました。

(河口より 1.6 km)



河口植生断面

河口ではありますが、ケカモノハシ - コウボウムギ群落、コウボウシバ群落、ハマエンドウ群落のような、海浜に成立する植物群落が目立ちます。河口干潟上には、海岸の波浪や風の影響を受けて砂が吹き寄せられ、海浜のようになっているからです。



コウボウシバ



コウボウムギ



ケカモノハシ



ハマヒルガオ



ハマエンドウ

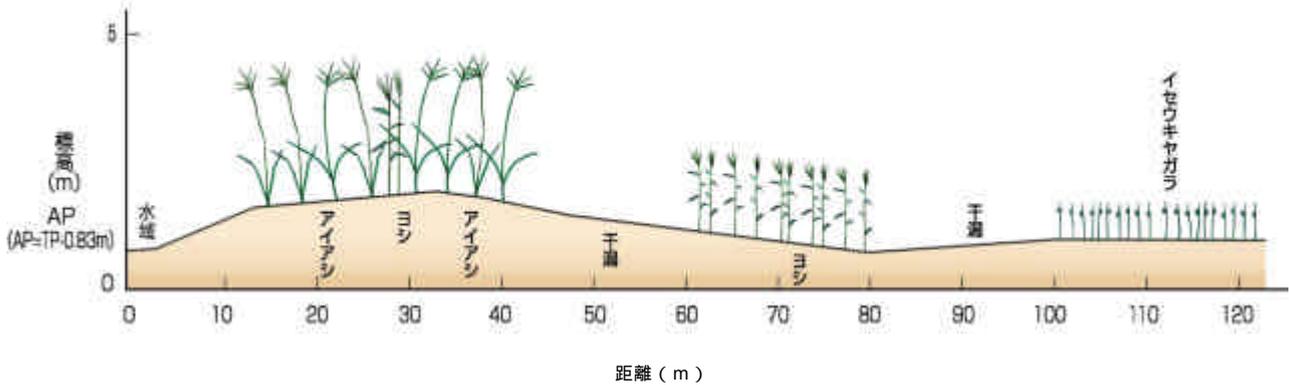


セイタカヨシ

(汽水域：河口より上流2～15 km)

河口干潟から第十堰下流の汽水域の水際には、干潟が広がっています。河口の流れは緩いため、侵食作用よりも堆積作用を強く受けます。また、塩分を含むため、粒径の小さい浮遊懸濁物質が凝集し、沈殿します。そのため、流速が緩い水際に泥干潟ができるのです。このような場所には、アイアシ群落のような塩沼植物群落やヨシ群落が成立します。

(河口より7.1 km)



汽水域植生断面



アイアシ



ヨシ

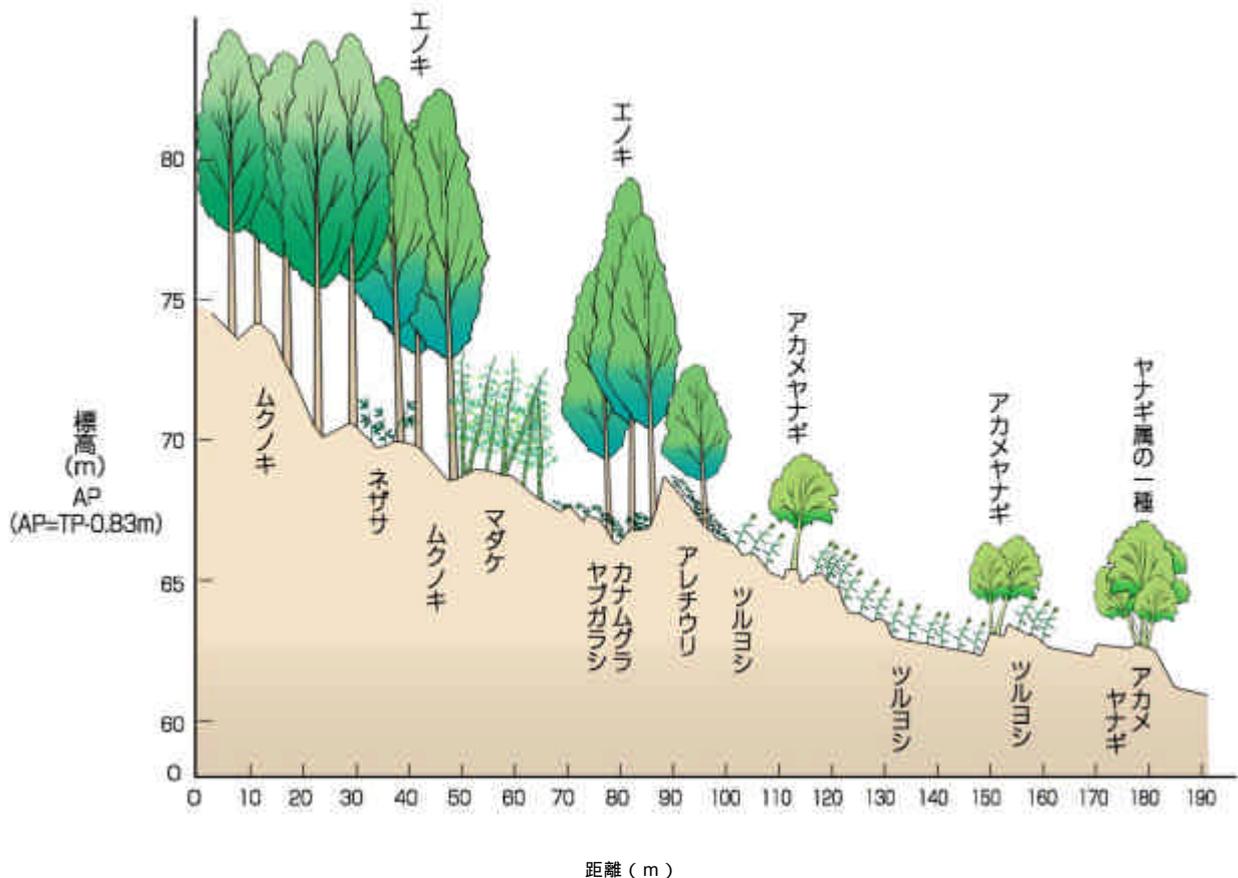


ヨシが生育している水際環境

(淡水域：河口より上流15～77.7km)

第十堰から池田ダムまでの区間は、中流域になります。中流域は、下流域よりも川幅が狭く、流速も速くなります。下流域よりも侵食および運搬作用が強まり、河床の材料は、砂礫が多くなります。礫が多くなると、水際はツルヨシ群落等が優占的に出現します。また、春季の水位の状況により、水際にアカメヤナギが活着します。アカメヤナギの種子は上流から水流によって運ばれるため、水際に線状に分布します。標高が高くなり、冠水頻度が低下すると、鳥が種を運んでくるエノキ - ムクノキ群落が成立するようになります。

(河口より40.8km)



淡水域植生断面

池田ダムよりも上流になると、水の流れが速くなります。ネコヤナギ群落のように、速い流れに対しても柔軟に変形するものや、岩盤上にしっかりと根を張る植物がみられるようになります。

上流から下流に至るまで、勾配の変化に応じて、地形や土壌の特徴、冠水条件などが変化します。そして、それぞれの立地環境に応じて、植生も変化します。

ただし、河川植生の構造は、水あたりや微妙な地形の違いなど、対象とする地点独自の環境に大きく影響を受けることから、河口からの距離によって、各地点ごとの植物の構造が一律に決まるわけではありません。



エノキ



ムクノキ



アカメヤナギ



ネザサ



マダケ



カナムグラ



アレチウリ



ツルヨシ